中央アジアにおける教育と発展：タジキスタンとカザフスタンの社会変動に関するケース・スタディーを中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 修一 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3798

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中央アジアにおける教育と発展
―タジキスタンとカザフスタンの社会変動に関するケース・スタディーを中心に―

Education and Development in Central Asia : A Case Study of Social Change in Tajikistan and Kazakhstan

森　岡　修　一

緒　　言

筆者はこれまで、主としてロシア（旧ソ連邦地域を含む）における言語政策及び民族文化・教育問題を中心に研究を進めてきたが、その成果の一端はすでに『コミュニケーション文化論集　6』（2008年３月刊）で明らかにしたほか、各種学会発表および報告書等でロシアのエスニシティに関わる教育の問題点と課題について論じておいた。とりわけ、フィールドワークに関しては『ロシア連邦のキャリア教育に関する総合的調査研究―グローバル化する中等職業・労働教育を中心として―』（平成17－19年度文部科学省科学研究費補助金　基盤研究Ｂ　海外学術調査　課題番号17402042）の研究成果「平成17年度中間報告書」（研究者代表　岩崎正吾・首都大学東京　2006年３月刊）、「平成18年度中間報告書」（同　2007年３月刊）を経て、「平成19年度最終成果報告書」＜本編＞および＜資料編＞（同　2008年３月）として成果を広く江湖に問うことができた。

こうした作業を通じて、われわれ共同研究チームの間には、さらに現代社会におけるグローバリズムの実態と問題点を明らかにするためには、ロシアと中央アジアの相互関係に焦点を当てた調査研究が必要不可欠であるとの共通認識が強固なものとなってきた。というのも、91年にソビエト社会主義共和国連邦が崩壊して中央アジアに新国家（タジキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン）が誕生したことによって、90年初頭以降の国家的政策転換等の実態を明らかにすることが、グローバル教育研究において焦眉の急となってきたからである。

そこで、これまで蓄積してきた調査研究データと分析内容を有効に活用するためにも、共同研究メンバーをほぼそのままに継続研究を行なうことが望ましいと判断し、『ポストソ連時代における中央アジア諸国の教育戦略に関する総合的比較研究』（平成 20－22 年度文部科学省科学研究費補助金　基盤研究 B 海外学術調査　課題番号 20402059）によって、新たな調査研究を行い、すでに「平成 20 年度中間報告書」（研究者代表　嶺井明子・筑波大学　2009 年 3 月刊）を発表した。その後の調査中間報告書は当論集とほぼ同時期に近刊されるが、本稿では、この 2 年間に筆者が学術調査を行なってきた、タジキスタンとカザフスタンにおける民族政策と言語教育を中心に、多民族教育戦略について論述していく。論点の本格的な整序等は来年度刊行予定の「最終報告書」に委ねることとし、小論では前掲両共和国の教育の実態のフィールドの、しかも限定された範囲でのラフなスケッチにとどめたい。

当研究班（研究代表者 1 名、研究分担者 3 名、研究協力者 12 名、他に各国の基幹民族現地協力・研究者 6 名）では、政情等の観点からトルクメニスタンを除く、タジキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、ウズベキスタンの 4 カ国を調査対象地域として、2－3 名の 4 グループによる学術チームを編成し、ローテーションによる変更も取り入れながら、2 ヵ年にわたって継続調査を行なってきた。最終年の 2010 年度の各担当地域は未定であるが、最終年度度調査を終えた段階で内容調整を行ないつつ、最終報告書作成準備に入る予定である。したがって本稿の論述に当たっては、筆者担当箇所のみならず、上述の「平成 20 年度中間報告書」における共同執筆者の記述からも援用することをお断りしておく。本稿は、中間報告書ならびに共同執筆草稿に対して、筆者が独自の判断で当テーマに即して大幅な加除訂正を施したものであり、本稿の執筆内容はすべて筆者の責に帰せられる。共同執筆者の諸氏のご指導とご協力に深謝したい。

タジキスタンとカザフスタンの対比指標

中央アジアの共和国間においてタジキスタンとカザフスタンは文字通り好対照を呈しており、比較項目としては面積、人口、首都、民族、言語、宗教、政体、元首、議会、政府、外交、軍事、経済改革、主要産業、GDP、GNP、経済成長率、物価上昇、失業率、総貿易額、主要貿易品目、主要貿易相手国、

通貨、為替レート、経済協力（わが国の援助実績）、対当該国貿易、在留邦人、在日人数といった指標が一般的に用いられるが、いずれの指標でもタジキスタンとカザフスタンは両極を成しているといっていい。

両極の対比を仮にT/K比と呼ぶことにして、いくつかの項目を取り上げてみただけでもT/K比の大きいことに驚かされる。たとえば面積比（T約14万km²/K約272万km²）、人口比（T670万人/K1,540万人）、GDP比（T37億ドル/K1,037億ドル）、GNP比（T513ドル/K5,221ドル）といった状態であり、経済成長率比（T7.7%/K8.5%）、物価上昇比（T19.8%/K10.8%）、失業率比（T17.6%/K7.8%）のデータとともに、総貿易額比：輸出（T約14億ドル/K約478億ドル）輸入（T約17億ドル/K約328億ドル）、などの驚くべき数字的格差（データはいずれも07−09年概数）が両国の政治的・経済的現状の相違を明白に物語っている。

教育学的観点からは民族、言語、宗教などの分析が不可欠であるが、タジキスタンにおいてはタジク人64.9%、ウズベク人25%、ロシア人3.5%の民族比であるのに対して、カザフスタンではカザフ人58.9%、ロシア系25.9%がほぼ大勢を占め、ウクライナ系（約45万人）、ウズベク系（約43万人）ウイグル系（約23万人）、タタール系（約23万人）、ドイツ系（約22万人）、韓国・朝鮮系（約10万人）、といったデータが多民族係数の差異を示してくれている。言語政策としては、タジキスタンがペルシャ語系タジク語を国家語として定めている（ロシア語は民族間交流語＝族際語）のに対し、カザフスタンではチュルク語系カザフ語を国家語としロシア語は公用語として位置づけられている、といった点に相違が見られる。宗教は、ともにムスリムのスンニー派が優勢であるが、タジキスタンではパミール地方にシーア派の一派であるイスマイール派の信者を抱えている。

教育のデータに関しては、人口の増減（自然増、社会増）、年齢別総人口比率、就学率と離学率、教育機関の種別（国立/私立、民族学校、全日制/定時制、就学前・初等・中等・高等・高等後）、ならびに機関数・生徒数などと並んで、卒業後の進路選択（キャリア・プラン）、財政面や学力面での分析等も不可欠となってくる。これらについては、前掲報告書所収の詳細な中央アジア5カ国調査・対比基本統計等を参照いただくとして、本稿では、2回にわたる学術調査の中から民族と言語政策に関連するものを中心に、タジキスタンとカザフスタン共和国に限定して論述していくことにしたい。

タジキスタンにおける民族と言語政策の位相

同共和国の学術調査は、遠藤忠（宇都宮大学）、森岡修一、デメジャン・アドレット（カザフスタン出身、筑波大学大学院）の３名に加えて、タジキスタンのズバイドロ・ウバイドローエフ、マジッド・シャナザロビッチ・グラヨーゾフ諸氏の支援を得て、2008 年 10 月 8 日（水）－17 日（金）の 10 日間にわたって行なわれた。

以下、訪問順に標記項目に関連した調査内容を略述する。

(1) 教育科学アカデミー

ルトフローエフ総裁によると、スタンダードは'95 年に第１次スタンダードが出されたが、まもなく第２次スタンダードに移行するとのことであった。第１次スタンダードと第２次スタンダードの違いは、第１次がタジクの特色を重視して作成したのに対し、第２次スタンダードは、独立国家共同体との関連を強めた点である。スタンダードは最低限の基準を示すものであり、民主主義社会の教育においては、さまざまな教科選択があってもよいが、競争原理の導入については望ましいことではない。

教育改革の重点は、内戦のためにさまざまな被害を受けた教育の質を向上させることである。特に、施設・設備だけでなく、教科課程や教授要目の充実および教科書の編集、時代の進展とともに増加してきた教科の再編・統合を図ること、の２点である。

教科の再編・統合については、シャリフゾーラ筆頭幹事自身が研究開発したとのことで、以下の説明が行われた。

教科の再編原理に関しては、統合の方向と多様化の方向とがあり、統合については主に初等段階で行われ、中等段階では現在も実験的に行われている。タジキスタンで取り組まれた統合の動きは、ロシアより早く 1980 年代から行われていた。当時ロシアではグーリエフとグラシェンコの２人しかこの問題に取り組んでいなかった。

具体的には、国語（タジク語）、読み、書き、文法の４つの教科が母語 родный язык の１教科に統合されたことである。実験は'89 年から開始され、導入は'94 年からである。

1989 年の言語法採択の過程で、これまでのタジク語の俗化（簡略化）政

策が問題化され、現代語テキストと古典的テキストとを教科の中にどう統合するか、ということが問題となったが、併せて他教科の内容と母語のテキストとの連関も課題となった。タジク語においては、表記の変遷は3回（もともとのルダキーの時代の古典文字・純粋言語の時代から、アラビア→ラテン→キリール文字へと3回の文字改革）あったが、'89年の言語法の導入は、ソ連時代の母語の歪みを正すねらいをもっていたので、以上のような問題意識が生まれたのである。言語法ではタジク語が国家語とされ（ロシア語は族際語）、タジク語の学習が必修化された（1−6学年）。

多様化については、以下の新設教科の動きがあった。

a「倫理」(3−4学年)、週1時間。内容は人間としての行為の在り方や人間関係の在り方に関することである。'91年から導入。

b.「愛国心」(3−4学年)、週1時間。2002年から導入。

c.「古典表記（アラビア文字)」(2−7学年 or 3−7学年)、週1時間。'91年から導入。

「倫理」や「愛国心」は以前「文学」や「歴史」で教えられていた内容を分離・独立し、充実させたものである。「学級の時間 классный час（воспитательный час ともいう)」との直接の関係はない(「学級の時間」は実施している)。

(2) アイニ記念教育大学

アブル・ハミット・ナジモフ第1副学長によると、本学は、学生数1万1千人、12学部、36専攻で構成されている。教員は約500人、うち10人はアカデミー会員、博士は30人以上、博士候補は140人を擁し、タジク人の学生の他、キルギス、アフガンからの学生が在籍している。

外国語教育では、英語、ロシア語、フランス語、ウズベク語が設置されており、学部は、数学、物理、化学、生物、ロシア語・文学、タジク語・文学、歴史・法律、工学、英語、ローマ・ドイツ語、地理、教育学（初等及び就学前の教員養成）の12である。

本学は、大学の規模としてはタジキスタンで3番目で、国家の主要大学 головной университет としての位置を得ている。ボローニャ・プロセスへの取り組みも行っており、バカラーブリ課程4年、マギーストル課程2年としている。

大学側との会談では、他に学部長等20人超の教員が同席して日本の実情などに対する熱心な質問が続いた後、アブル・ハミット・ナジモフ第1副学長から次のような興味深い指摘があった。

教育問題は山積している。ソ連時代と比べ、博士や博士候補の学位をもつ教員の平均年齢は10歳上昇しているが、内戦時に人材が大量に流出していることもこの問題の背景にあり、特に、ロシア人教員、研究者の流出が著しかった。

さらに、学生の言語問題に対応する課題がある。タジク語の他にロシア語、さらに他言語が使用されているが、対応するソフトが少ない。ソ連時代と比べ、大学教員の資格向上の機会が少なくなっており、問題を感じている。独立後の重要課題であるタジク語教育のメトディストмето́дистが少ない。そのため、教材も、現在はほとんどロシア語でありタジク語は少ない。また外国の大学との提携数が少ないので、日本と提携できればと思っている。

(3) タジキスタン科学アカデミー

イローロフ総裁によれば、科学アカデミーは旧ソ連時代以来の方針を引き継いで運営されており、モスクワ、ノボシビルスク、キエフなどの組織と師弟関係を結び、指導を受けている、とのことであった。研究内容は、文学では哲学、歴史、文学などにわたっているが、特に文学ではアラビア語、タジク語、イスラムの文学が研究されている。

教育は科学的研究と統一して行われており、アカデミーには旧ソ連の制度を引き継いでアスピラントゥーラとドクトラントゥーラが設置されている。アスピラントゥーラへの入学には、哲学（専門に関わる内容）、外国語（専門に関わる内容）、専門科目の3種が課せられており、3年間の履修後学位請求試験が行われ、その合格により博士候補の学位が与えられる。ドクトラントゥーラには、博士候補として一定期間（5年程度以上）研究に従事したものを対象に入学が認められるが、この場合、試験はなく論文審査などを行って入学が決められる。ドクトラントゥーラでは、教育よりも純粋に研究に従事して研究能力を高め、研究成果をまとめることに力点を置いている。

(4) ドシャンベ市第15番学校

9月9日の独立記念日、2月23日の軍隊の日（軍人、ベテランなどを招待

したり、基地を訪問したりする）といった記念日（祝日）に関連するエスニック・アイデンティティの重要性が指摘され、学級の時間の位置づけについて説明があった。

(5) 補充教育施設「英才発達センター」

サファロフ所長によると、本施設は、英才教育を行うために設置された。教育内容は英語、情報学、タジク語・文学、ロシア語、法律、化学、生物学、数学、物理学、ジャーナリスト学、地理、ロシア史、さらに、別枠で「ギター・コース」も開設されている。

市長のイニシアティブで設置され、英才児のために無償の教育を行う施設であり、かつて子どもたちの議会がつくられ、そこで採択されたメッセージの一つに本センターの設置があった、との説明の後、英語教室や情報室を見学した。

(6) タジキスタン国立言語大学

本学は、1980年にロシア語大学として創立され、独立後の'92年に言語大学に改組して、西欧語等を加えた。学生数は3,000人近く、教員は200人である、とのことで、さらに副学長ジョーエフ氏から以下のような詳細な説明があった。

本学の構成は、ロシア語・文学部、東洋言語学部（中国語、韓国語、日本語等）、西洋言語学部（英、仏等）で、東洋学部では2002年に日本語学科が設置された。日本人の教員はこの7年間で1−2名で、いずれもボランティアである。数人の教員は日本で研修（6ヶ月）を受けたことがあり、現在も1名が日本で研修中である。4年前に、日本大使館の補助金により日本語学科の教室を増築した。

日本語学科の学生は40名在籍しており、定員12名で1及び2年生はいない（募集停止）。これまで24名卒業し、うち4人は当学科の教員となっており、数人は国際機関に就職しているが就職先は少ない。そのため昨年度より日本語学科の募集を停止した。ウバイドローエフ氏によれば、その主たる理由は、教員不足のせいではないかとのことである。副学長との面談後、日本語学科の学生と懇談会をもったが、どの学生もきわめて熱心で日本への留学を希望しているものも少なくなかった。とはいえ、タジキスタンの経済的事

情を考えたとき、その希望を実現できる可能性は低い。

韓国語については、学科の他に韓国語センターも開設されており、一般からの韓国語学習の要求に応えている。他に、2008年6月から開設されたロシア語センターもある。センターはこの二つだけである。入学に当たってもっとも人気のある学科は中国語学科であり、倍率は5−12倍でこの学科の卒業生の就職は好調である。2番目は英語学科で、倍率は4−5倍であるが、日本語学科は2倍程度である。

ロシア語学部は2000年まではあまり人気がなかったが、近年は人気が出てきた。学生数は550人、学科構成は①タジク語学校のロシア語と②ロシア語学校のロシア語の2学科構成で、全日制課程と通信制課程ももっている。2007年はロシア語の年で、モスクワ言語大学からバガリューボフ教授はじめ2名の教員を招聘して講義を行った。また、同年にはロシアの言語大学に4人の学生を派遣した。2009年からモスクワ言語大学にタジク語学科が開設される予定であり、08年11月4日からロシア語センターでフォーラムが開催されることになっていて、ロシアとの関係は一層緊密化するだろう。すでに、学位審査はモスクワ言語大学で受けることができる。

ウズベキスタン、トルクメニスタン、トルコ、アフガニスタンなどから留学生も来ており、韓国、中国、エジプトには学生を派遣しているが、イランとの関係は留学生がたまに来る程度で関係はそれほど緊密ではなく、アメリカ、イギリスなどとの関係も薄い。

(7) ドシャンベ市44番幼稚園

（省略）

(8) タジキスタン工科大学

本学は、タジキスタンの34大学の中のひとつで、創立18周年を迎える若い大学である。設置の目的は、市場の需要に応えて質の高い教育を施すことであり、本学は、エネルギー・産業省に所属している。北部フジャン及び南部のクリャブに分校をもち、附属カレッジ1校と附属ギムナジウム3校を有している。学部構成は、①情報・通信技術、②情報システム、③デザイン、④工学部、⑤経済・経営、⑥国際学部、⑦タジク−ウクライナ学部、の7学部である。以上の学部を通して8分野23専攻の専門家養成を行っている。

国際学部は外国に学生を送り出す教育を行っており、タジクーウクライナ学部は、08年度にできた若い学部で、経営専攻や総合技術専攻をもっている。2年間ここで教育を施した後、ウクライナに学生を送り込み、後半の教育を行うための学部である。

本学は、2004年から国のパイロット大学として「単位制導入」の試行を行っている唯一の大学であり、モデルはアメリカのものに基づいている。バカラーブリ課程・4年で120単位、それに加えてマギーストル課程・2年で180単位となっている。現在のところ、旧ソ連型の大学制度と併存している。2007年10月に認証が行われ、08年度から全国の大学に導入することになった（今年度新入生から新制度への移行開始）。単位制における評点は10段階であり、これまでの4段階と異なる。

EUのテンプスとソクラテスというプログラムは、大変参考になった。特に、テンプスを通してイタリアやドイツ、英国の大学との関係が生まれた。

接続の問題については、タジクの初等・中等教育は11年制であるが、他方、アメリカは12年制、イタリア、ドイツ、英国は13年制である。したがって、初中等教育の改革も必要である。本学は、附属ギムナジウムで12年制初中等教育の試行をさせてくれるよう国に提案している。つまり、大学教育と併せて16年間が必要と考えている。

ロシアのBAK（学位審査会）によって、高等教育においては469の専攻が区別されているが、タジキスタンで養成しているのは、このうちの半分弱（45－50％）の専攻に過ぎない。タジキスタンで養成しているのは、アスピラントゥーラ課程で46専攻、ドクトラントゥーラ課程で18専攻であり、その他の専攻（専門）は外国で養成せざるを得ない。ここで、ロシアとの関係の重要性が出てくる。アスピラントゥーラ、ドクトラントゥーラといった旧制度は当面存続させ、新制度と併存させていくことになっているが、4年後に検討の時期が来るかもしれない。

(9) M. オリモフ記念芸術カレッジ

教員は45人であり、本校の教員はほとんどこの学校の卒業生で、卒業後、主に外国の大学に進学したのち、本校に戻ってくる。卒業生で進学するものはタシュケント、モスクワ、ペテルブルク、ミンスク、イランなどである。国内での進学先としては工科大学か、芸術大学である。毎年卒業生が25－

30 人いるが、そのうち半分の 12 人－15 人が大学に進学している。

(10) ジャイカ JICA タジキスタン事務所

コースそのものは 200 コース以上あるが、重点分野を定めている。その一つである統計コースの蓄積が 10 人以上となり、彼らがワーキング・グループを作り、2010 年の国勢調査の実施に備えている（前回は 2000 年）。まもなく留学生無償資金協力事業が始まるが、これは、省庁の機能強化、人材の充実を目的とし、1 期 4 年周期の予定である。毎年 5 名を省庁職員中英語のできる人材から選び 2 年間派遣し、マスターを取得させるが、日本の受入大学は国際大学や立命館大学などである。

内戦や独立の影響も大きい。かつては韓国人が 1 万人以上いたが内戦のため、2,000 人程度に減ってしまった。ドイツ人も同様である。また、ロシア人は 30 数万人いたが、6 万人ほどに減ってしまった。今は、人口の 1% しかいない。ソ連時代には、中央はタジキスタンに対する技術移転をむしろ避けていた感があった。国家予算のほぼ 60% がソ連中央からの補助金でそれなりに豊かであった。現在は、国内産業がまだ充分ではないので、海外への出稼ぎは百万人程度である（人口 670 万人）。出稼ぎからの送金が 2,087 万ドルにも上り、GDP 1,943 万ドルを上回っている。

長谷川けん所長によると、中国の進出が目立ち、商品のほとんどが中国製である、とのことであった。また、出稼ぎ者が多いため、子どものうち 12 歳から 17 歳への負担が重く、就学率の低下、エイズの増加、その他しつけ問題などが激化している。出稼ぎ者の 60% は単純労働者であり、農業を加えると 70% が肉体労働で、過酷な条件で働いている。出稼ぎの相手国は、ロシア 84%、ウズベキスタン 5%、キルギスタン 3%、カザフスタン、ウクライナ、アルメニア各 1% である。

国内については、南部のハトロン地方は最貧地域であり、水資源開発に力を入れている。ゴルノ・バダフシャン地方出身者の中央省庁に占める割合は高くなっている。省庁では、地縁・血縁主義が強いが、情報省では地縁・血縁を排して採用が行われている。大統領はクリャブ市（ハトロン地方）出身で、北部のスグド地方とゴルノ・バダフシャンとのバランスを取っている。

(11) アジア開発銀行 ADB タジキスタン事務所

タジキスタンには ADB の他に、援助主体として NGO、UNICEF、世銀などさまざまあるが、最近の動きとしては、援助主体がそれぞれタジク政府と個別の援助を行うよりは、横の連携をとって、タジク政府に対する一体的な援助計画を立てるべきではないかという方向がでている。たとえば、保健分野がもっとも先行しているが、世銀が主導して連携的な援助事業が行われている。

アジア開発銀行としては、融資事業と技術協力事業の二つの事業で支援を行っており、融資事業については、初等・中等教育に的を絞って行っている。その内容としては、教育課程の改善、校舎改修・新築、教員の研修などである。高等教育については対象にしていない。残念ながら、ソ連崩壊以降、教育水準の低下傾向は続いている。特に、高等教育の金権体質には目立った変化は見られず、「通知表の成績も金で買える」といわれている。

また、タジキスタン政府については、教育と医療についての財政手当を後回しにする傾向が見られる。2009 年度から 12 年度にかけて日本、スイスなど数カ国が共同して教育、医療などの社会分野での援助を実施する計画を立てている。特に、教育では就学率の低下、秋季収穫期（綿花）における、労働への駆り出しによる学習時間の大幅短縮などの問題が、初中等段階でも高等教育段階でも起こっている。

GDP の 40% 程度が出稼ぎによる仕送りに頼っている状況があり、経済状況は深刻である。タジキスタンは、まもなく ADB 加盟 10 周年を迎えるが、電力供給はまだ不安定であり、今冬は記録的な寒波に見舞われ、停電が頻発した。エネルギーの依存では、電力はトルクメニスタン、石油はウズベキスタンに頼っている。

これまで、タジキスタン政府の要請に応じて、産業基盤整備（道路、エネルギー）、教育、医療、マイクロ・クレジット、農業など分野でいろいろな事業を展開してきたが、今後は、分野を絞って事業展開をしようと考えており、年内中に絞り込み作業を終える予定である。教育、医療は重点分野の候補であるが、相手に補助や融資を使いこなす人的能力が整っていないという問題がある。尾城まこと所長の話では、タジキスタンの治安状況については、国連の基準で phase 1 と評価されているが、現在は大分良くなったと感じている、とのことであり、訪問時の夏には所長自身、家族でゴルノ・バダフシャ

ン地方に出かけた体験談を話してくれた。ADB でもしばらくは「単身赴任 single posting」地であったが、現在は「家族同伴赴任 family posting」地となっている。

カザフスタンにおける民族と言語政策の位相

同共和国の学術調査は、岩崎正吾（首都大学東京）、森岡修一、タスタンベコワ・クアニシ（カザフスタン出身、筑波大学大学院）によって、2009 年 10 月 10 日から 17 日の 8 日間にわたって行われた。

カザフスタン（人口約 1,500 万人）は、13 州（以前は 19 州）とアルマトイ特別市及び首都アスタナから構成されている。アルマトイ（人口約 140 万人）やアスタナ（人口約 70 万人）は、98 年に特別指令都市となった。今回訪問したカラガンダ市は、人口約 88 万人でカザフスタン第 2 の都市であり、ナザルバエフ大統領がここの冶金工業大学を卒業し、冶金工場に勤めた町である。独立後に首都の候補となった。スターリン体制の下でヴォルガ・ドイツ人がシベリアやカザフスタンに追放され、1940 年代にはカラガンダの人口の 70% をドイツ人が占めたこともあったが、現在は約 10% 程度だという。石炭産業は現在も主要産業の一つとなっており、強制収容所や日本人収容所のあった町としても歴史にその名を留めている。

(1) ゴーリキー記念初等中等教育学校（カザフ語・ロシア語混合学校）

生徒数 583 人、教員は約 50 人で、アルマトイから自動車で約 1 時間のところにある、ボレック村のカザフ語・ロシア語混合学校である。週 6 日制の 2 部制（交替制）の学校で、午前中からは中上級学年の授業（1 日 6 時間）があり、午後からは低学年の授業（1 日 4 時間）がある。理系のプロフィール教育を行っているが、文系は要望がないので本校では行っていない。各学年の 1 クラスの平均人数は 19.2 人で、各学年 2−3 クラス、平均 3 クラスである。2 クラスの場合、ロシア語クラスとカザフ語クラス比が 1：1 であり、3 クラスの場合、ロシア語クラスとカザフ語クラス比が 1：2 となっている。

教授言語（言語教育）・多民族教育　カザフ語クラスではロシア語は第 3 学年から、ロシア語クラスではカザフ語は第 1 学年から学ぶ。国家教育ス

タンダードの規定に従い、英語はどのクラスも第５学年から始まる。数年前に第１学年からの３言語教育を試みたが、うまく行かなかった。

本校には38民族の子どもが通っており、その中にはエベンキなどの少数民族の子どもや、１民族１人という場合もある。教授言語の選択は、必ずしもカザフ人だからカザフ語クラス、ロシア人だからロシア語クラスという訳ではなく、親の希望によって選択する場合が多い。少数民族の場合、法律では５人程度集まり、母語によるクラス開設の要望があれば開設しなければならない。

カザフスタンには民族の集住地域に、ウズベク語学校やタジク語学校及びウイグル語学校などがある。母語学校や学校の中に母語クラスを開設できない場合は、日曜学校や文化センターなどに通わせる親もいる。最近問題になっているのは、カザフ人帰還者の子どもの教育で、ラテン文字やアラビア文字しか分からない子どもがおり、それらの言語での教育を望んだり、中には中国語で学ばせたいという親が出てきていることだ。彼らにはキリル文字の学習など、初歩から教えなければならず、頭を抱えているが、根気強く取り組んでいる。

統一国家試験（EHT）　09年の成績は、エンベクシカザフ郡内の学校83校中５位という結果だった。統一国家試験は、中等教育終了資格試験と大学入学試験を兼ねている。５科目のうち、カザフ語、ロシア語、数学、カザフ史の４科目が必修で、１科目が選択必修（物理や化学など）である。そのうち、ロシア語は大学入学試験の点数には加えられない。

EHTの試験問題はカザフ語とロシア語の二種類作成されており、どの教授言語学校（クラス）で学んだかによって選択される。○×式（５つの選択肢から１つ正解を選ぶ方式）なので、これだけでは子どもの能力は伸ばせないと考えている。小さいときから自分で考える力、考えたことを話す力、自分のことは自分で判断し実行する自律して活動する力などの育成をめざしている。

中等教育終了の判定は、EHTの成績を５段階評価に換算し、３点以上を合格とする。２点以下の場合は、普通の卒業試験を受けさせて卒業させる。カザフ人帰還者の子どもやウズベク語学校、タジク語学校及びウイグル語学校などでは、EHTを受ける代わりに、「総合的テスト」を受けさせて卒業や大

学への入学を判定する。これは「普通初等中等教育機関における学習者の成績の途中評価、中間および最終国家試験の実施規則」（2006 年 9 月 7 日付教育科学大臣省令 No. 481）に準拠した措置である。

国際学力テストへの対応　現在、カザフスタンは TIMSS には入っているが、PISA には入っていない。しかし、12 年制教育制度（4－6－2 制）への移行に伴い、キー・コンピテンシー（ключевые компетентности）を重視した改革が進行しており、PISA に入る動きがある。

道徳教育・宗教教育・学級の時間　道徳教育の特設時間は国家基準にはないが、本校では 2 年前から導入しており、全学年で週 1 時間行っている。道徳教育を誰が行うのか試行錯誤した結果、学級担任が担当することに落ち着いた。学級の時間とは別に、学校要素から時間が割り当てられている道徳教育の目標は、一つは自己発見、自分についての研究、自己認識であり、また、もう一つは伝統的な価値教育を重視しており、後者の場合は、昔の伝統や守るべき価値、目上の人に対する尊敬等であり、各民族の伝統や歌、踊り等も取り入れている。

学級の時間には、進路指導や職業指導、道徳の規則などを取り扱う。宗教の時間は､週 1 時間が基準に規定され本校の教科プランにも導入されており、宗派教育ではなく、宗教の歴史や現状について教えるものだ。10 月 25 日の国家記念日、12 月 16 日の独立記念日には、生徒は登校して、国旗を掲揚し国歌を歌う。その他の行事では国歌を歌う。最も重要な行事の一つは、9 月 1 日の первый звонок と最後の последний звонок である。

授業見学　①第 10 学年の数学の授業：物理－数学の分野別教育のクラスで、校長の担当授業であり、女子のみ 7 人の生徒によるロシア語教授言語クラスである。第 10 学年から EHT の準備が始まるので、そのための問題集に取り組んでいた。最初に解く問題を何題か生徒に決めさせ、解答の時間を生徒が自分で決めて実施する。高度な内容の問題を生徒が独自のペースで黙々と解いていき、校長は必要に応じてアドバイスするという、学校というよりはレベルの高い塾の風景といった趣であった。

②第 2 学年のシュマコーワ・メソッドに基づく「変化」の授業：ロシア語

表. 物理ー数学分野別教育クラスの第10学年時間割（・印を付した教科目は特に本稿に関連の深い科目）

曜日 時限	月	火	水	木	金	土
1	地理	化学	・世界史	基礎教練HBП	Y	・英語
2	生物	・ロシア語	化学	・法の基礎		化学
3	情報	幾何	・文学	代数	П	幾何
4	・カザフ語	物理	・英語	体育		・文学
5	代数	地理	生物	物理		物理
6	・カザフ史	・カザフ語	体育	・道徳	K	・カザフ文学
7						

教授言語クラス。「変化」の課題が終わると「秩序」→「カオス」へと移行する。芸術と歴史と労働教育（裁縫）の統合授業。衣服のモードの多様性、その変化の歴史、その理由、それぞれの時代にはそれぞれのスタイルがあることや、人々の趣向の変化などについて生徒に考えさせる授業である。

③職業指導（プロフオリエンターツィア）の授業：第10・11学年の合同授業。ロシア語教授言語クラス。クラス人数16人（男6人、女10人）。職業指導の時間は特別に規定にあるわけではないが、第9－第11学年で学級の時間を利用して、担任が行っている。

(2) シュコーラ・ギムナジア No. 2（カザフ語・ロシア語混合学校）

学校案内と授業見学の後、教授法研究室で質疑応答を行なった。その際、日本語クラスの生徒2人（第6学年生の男女）が日本語で案内してくれた。45年前に設立された伝統ある古い学校であり、1999年まではロシア語教授学校であったが、現在はカザフ語教授クラスとロシア語教授クラスのある混合学校となっている。生徒数1,300人、教員数103人。規準定員640人を越えているので、2部制（交代制）をとっている。午前中は主に低学年と高学年、午後からは主に4学年以上の授業を組んでいる。

全クラス46のうち、カザフ語クラスが16、ロシア語クラスが30である。ロシア語クラスは生徒数が多いので、1クラス32－34人のところもある。カザフ語クラスは約25人となっている。

教授言語（言語教育）・多民族教育　カザフ語クラスの場合ロシア語は第3学年から学び、ロシア語クラスの場合カザフ語は第1学年から学ぶ。英

語は本校の場合、「外国語早期開始実験学校」に指定されているので、第2学年から教えている。教員にはカザフ語の能力が要求されており、ロシア人の教員もできるだけカザフ語で話すように努力している。最近新設されている学校にはカザフ語学校が多い。

本校は「外国語早期開始実験学校」であり、ドイツ語は選択科目として第2学年から教えている。また、日本語は昨年実験的に第5学年からの選択科目として導入し、生徒は現在第6学年になっている（新しい第5学年はいないということ）。これは、JICAの職員が本校に来て、日本語教育を提案したので、生徒や親に要望を募って開始した。2クラス36人（1クラス18人）の生徒が学んでいる。週1時間（45分）の授業である。それ以外に、本校を基地として韓国語の日曜学校を開設しており、本校には17民族の生徒達が通っている。

道徳教育・宗教教育・学級の時間　最近の青少年はどこか頼りがいがなく、何か欠けているような趣があり、道徳教育は重要である。学級の時間の主な課題は訓育であり、道徳教育や愛国教育を行っている。シンガポールの方式を参考にして、「カザフスタンの歴史を知る」「カザフスタンの国を知る」「カザフスタンの国の発展に貢献する」という方針を立てて、それぞれの学年に応じた取り組みを行っている。

訓育活動には10のテーマが設けられている。①愛国心教育、②法教育（シチズンシップ教育）、③美育、④家庭教育、⑤健康教育などである。重要な学校行事として、独立記念日（12月）や戦勝記念日（5月）の前後には、時間をかけて準備し、イベントを行う。昨年から、国家に関する文書はカザフ語のみとなったことが特筆すべき重要事項である。

その後、第3学年（ロシア語の授業。24人の生徒）、第1学年（カザフ語クラス、アーズブカの授業。生徒数16人）、第6学年（コンピュータによるカザフ語の授業）、第9学年（カザフ語の授業。生徒数13人）、第6学年（日本語クラスの授業参観。生徒数18人；男11人、女7人。週1時間、45分の授業。教授言語はカザフ語。日本語教師の夫は日本人で、クアニシ氏の知人）等の授業を参観し、懇談した。同校には記念博物館（2002年5月22日に開館）が設置されており、日本語担当の教師との博物館担当の女子職員が案内してくれた。

(3) シュコーラ・リツェイ No. 60（ロシア語教授学校）

シュコーラ・リツェイ No. 60 は、ナザルバエフ大統領によって 2008 年 9 月 1 日に開設された、数学、物理及び情報の深化学習を行う自然－数学分野の学校である。校舎も昨年出来たばかりであり、この新しい教育機関は、ツェリノグラード市に設立された最初の新しい教育機関の一つ（人文・経済リツェイ No. 9）を基礎にして設立された。物理と数学の場合 2 つのグループに分かれ、情報では 3 つのグループに分かれて授業を行う。

リツェイ存続の 17 年間を通して 1,870 人が卒業し、そのうち 96 人が優秀生徒として卒業した。400 人以上が市のオリンピックで受賞し、20 人以上が共和国オリンピックで受賞した。また、5 人が国際オリンピックに参加し、勝利した。これらの伝統は、新しい教育機関にも継承されている。アスタナ市は 3 つの地区より成るが、今年は地区オリンピックで 78 人が参加し、72 人が受賞、市レベルでは 60 人が受賞した。

教員は 90 人である。その他にも、ユーラシア大学や研究所から出講している教員が 10 人おり、ロシア語、歴史、数学、物理、地理、生物などのプロジェクト活動等を行っている。科学プロジェクトを重視しており、19 のプロジェクトを立ち上げ、オリンピックに参加している。本校は初等教育部だけが 2 部制で、中等教育部は 1 部制である。学校は、8：30 に始まり、14：40（実際は 15：00）に終わる。授業が終わった後も、生徒はサークル活動（課外活動）等に従事する。

教授言語（言語教育）・多民族教育　ロシア語教授学校で、カザフ語、ロシア語、英語を第 1 学年から教えているが、08 年度から、フランス語を第二外国語の選択教科として第 10－11 学年に導入し、週 8 時間教えている。2010 年の春に初めての卒業生が出る。民族構成はカザフ人が 1,400 人、ロシア人が 150 人、その他ウクライナ人、ブリャート人、ドイツ人、デンマーク人などである。1 民族 1 人の者もいる。民族文化や民族友好の教育については、トピック的に人身売買などについて話し合ったりはするが、一つの家族として考えているので、特別に行なう必要性は感じていない。

道徳教育・宗教教育・学級の時間　学級の時間は、訓育担当副校長が年間計画を作成し、学級担任が週 1 時間実施する。その内容は、訓育活動やキャ

リア教育、国家行事等について幾つかのテーマから構成されている。また、テロや自然災害への対処など、安全生活の基礎（ОБЖ）も取り入れている。

春には、大学からキャリア教育の一環として大学説明に来るので、第10－11学年の生徒を一堂に会して説明会を行う。9月22日はカザフ語が国家語として制定された日なので、その意味や国家のシンボルなどについて考えさせる取り組みを行っている。

進路・就職・職業指導　生徒の100％が大学へ進学する。08年の卒業生78人のうち、30人はアメリカ、カナダ、イギリス、チェコのプラハ大学など欧米への留学、20人がトムスクやモスクワ及びノボシビルスクなどロシアの大学留学、18人がカザフスタンの大学へ進学した。卒業生の中には、2年間日本語を勉強した後、日本に留学した者もいる。ソ連時代と異なって欧米への留学が多いように見えるが、必ずしもそうではなく、年によって変化する。

生徒は当該ミクロ団地からやってくるが、家庭の職業は、エンジニア、医者、教員、サービス業など多様である。中には議員の子どももいる（卒業生の内訳からして、かなり裕福なインテリの家庭の子弟が来ていると考えられる）。第1学年への入学に際しては、心理診断、読み書きテスト、面接などを行う。第7学年への進級に際しては、物理、数学、英語のテストを行う。第8学年以降、数学、物理、情報の分野別教育へ移行する。本校には就学準備クラス（5－6歳）がある。週5日制、22時間の教育を行っている。その他、就学準備クラスとして、幼児学校（マールィシュキナ・スクール）が開設されており、日曜日（日曜学校）か、または週2日通ってくる。

生徒自治と授業参観　選挙権と被選挙権のある第7学年から第11学年の生徒によって大統領を選出する。生徒による審議事項としては、校内行事や修学旅行の行き先などである。

ボラシャーク国家奨学金で外国に留学すると、帰国後5年間の就労義務がある（重要事項）との説明を受けたのち、第4学年、ロシア語の授業など4つの授業を参観した。

(4) マハンビエト・ウチェミソフ記念生徒宮殿

1988 年 3 月 11 日にピオネール宮殿として開設され、2010 年で 22 年目を迎えることになる。施設の目的は、生徒の想像力を発達させること、生徒の健康を増進することであり、補充教育機関として位置づけられている。そのため、各種サークルの部屋の他に、体育館やプールが設置されている。ヨーロッパで言えば、インフォーマル・エデュケーションに当たり、生徒は基本的に放課後この施設にやって来る。

国際活動　青少年の自由時間をコントロールする欧州協会の本部がチェコのプラハにあるが、ここの所長もこの協会の一員として活動している。欧州協会が主催する様々な国際イベントや国際コンクールに参加しており、子ども国際サミットなどもここで開催された。

国民統合の行事　アスタナ市は 11 年前に遷都されたが、首都誕生の日の祝祭行事や愛国心に関係するイベントを行う。

サークル見学　①生け花サークル。児童 4 人。11 月に「こんにちは日本」のイベントがあるので、その準備をしている。日本の大使も来る予定とのことであった。②ダンス。初年度クラスで、様々な民族の子ども達が参加している。③カザフ民族の刺繍サークル、など。

(5) 初等中等学校 No. 61 （カザフ語教授学校）

2008 年に新築校舎に移転した施設・設備の整った素晴らしい学校である。校舎は、小・中・高のクラスが 3 つのブロックに分かれて配置されている。週 6 日制の学校で、生徒数 1,612 人、教員数 114 人である。

当学校の基本方針は、美育を重視した教育を行っていることで、絵画、陶芸、ダンス、演劇、テレビ番組制作などをサークル活動で実施している。美育を深化して教えるクラシック・ギムナジウムになるように準備しており、そうなれば正式な授業として編成することが出来る。現在は、学校コンポーネントを使って一部を授業として教えている。

この学校のもう一つの特徴は、全ての教室や廊下などにモニター・カメラが設置してあり、観察センターから授業や生徒の一部始終をモニターできる

ことである。ホームページには、それらの様子を編成して掲載しており、どの家庭からでもアクセスすることができ、父母は学校の様子を知ることができる。

教授言語（言語教育）・多民族教育　カザフ語は第１学年から、ロシア語は規定どおり第３学年から、英語は「外国語早期開始実験学校」に参加しているので、第２学年から教えている。今年から、第５学年から外国語としてアラビア語を教えている。これはアンケート調査をした結果、親の希望があり、本校にアラビア語を教えることのできる教師がいたからである。従って、本校では第５学年からは、選択外国語として英語かアラビア語を生徒は選択することになる。カザフスタンでは、外国語は必ずしも英語を選択しなければならないということではないが、まだアラビア語の希望者は少ないのが現状だ。

本校の生徒の民族構成は、ほぼ全員がカザフ人で、それ以外はロシア人が３人、アゼルバイジャン人が２人、キルギス人が１人いる。

道徳教育・宗教教育・学級の時間　週１時間学級の時間を設けており、訓育担当教師が学校全体のテーマを作成し、この学校計画に基づき、学級担任が都合の良い時間を設定して行う。訓育が主目的であり、基本的なテーマは、愛国心教育や法教育（シチズンシップ教育）である。また、生徒の振る舞いについて話し合ったり、衛生などについての知識を教える。ラマダンやイスラムに関するテーマは必ず行うということではなく、話し合うことをクラスで決定すれば、取り上げるといった程度である。

イスラム的な価値を重視している家庭が多いが、学校では法律に基づいて世俗教育を行っており、イスラム的な価値教育は行っていない。09 年から、教育省は新しい３つの授業の導入について通達を出した。一つは、第 10－11 学年での「運転実習」の授業、第５学年での「金融」の授業、そして第９学年での「宗教」の授業である。「宗教」の授業は、宗教についての基礎知識や世界の宗教について教えるもので、イスラム教の宗派教育を行うのではない。時間は 0.5 時間なので、本校では後期にそのための時間をとることにした。その他、生徒の登校時にカザフの伝統的な音楽を流したり、毎日の授業開始時には国歌を流して歌わせている。

本校は、ほぼ完全にカザフ学校なので、カザフ人のメンタリティとして、いじめのようなことは起こらない。むしろ生徒間の協力や挨拶をしたり、大人への敬意を表したりすることは当たり前のこととして行われており、男女間の関係も良好である。これはカザフ人の家庭的価値の反映である。田舎のカザフ人はその傾向が特に強い。生徒の飲酒や喫煙も全くないが、親との関係でいえば、様々な要求や文句を言ってくる親は多く、子どもの写真の写り方（配置）に文句を言うという、日本と同じような現象もある。

授業見学　第3学年のカザフ語（母語）の授業などのほか、学内施設を見学したあと、講堂で、カザフの伝統楽器ドンブラの演奏や踊りを観賞した。

(6) 共和国技術・職業教育及び資格授与学術方法センター

2005年に創設され、教育・科学省の管轄下にある。当該センターの目的は、職業カレッジ及び職業リセの卒業者の資格が、市場経済体制の中で適切であるかどうかを評価することである。また、市場の労働者の資格取得や資格向上にも関わっているが、何もないところから出発した資格評価・授与システムなので試行錯誤している。

国際協力・支援活動　職業・技術教育に関しては、ドイツ技術協会やEUとの共同プロジェクトに参加するなど、国際プロジェクトとの協同活動を行う中で進めている。ILOや欧州教育ファンドとも共同した取り組みを行っており、これらの結果をカザフスタンの職業技術教育に役立てている。コペンハーゲンプロセスには加盟も参加もしておらず、ロシアとの協力関係はないが、ベラルーシとは条約を結んでいる。これは、ソ連時代からのものでそのポテンシャルは大きい。

(7) カラガンダ国立総合大学

アスタナにあるユーラシア民族大学に次ぐ大規模国立総合大学で、1972年に設立され13学部、14,000人の学生と院生、2,700人の教授陣、48人の博士、342人の博士候補を擁する。

1988年から始まった国際大学憲章に署名し、2005年にボローニャ・プロセスに参加することになった。学士（バカラブル）4年、修士（マギストル）

2年、博士3年の3段階システムを採用している。大学の前段階としてのカレッジも付設しており、カザフスタンでは初めて、2005年に大学としてのアクレディテーションを得た。

総合大学となる以前は、1938年から教員養成に取り組んでおり、師範学校（ウチーチェリスキー・インスチトゥト）として出発し、1952年に教育大学（ペド・インスチトゥト）になり、その後1972年に国立総合大学となった。就学前教育と初等教育の教員養成に携わり、これまで、15万人の教員を養成した。教育学の研究方向は2つあり、その一つは、学習者のモチベーションの向上に関する研究と進路支援及びキャリア教育分野の研究、もう一つは、効果的な学習支援に関する研究である。当教育学部の特徴は、3言語で教えることのできる教員養成を目ざしていることである。

教授言語（言語教育）・多民族教育　本学での教授言語はロシア語とカザフ語であり、英語で教育するクラスもある。学生の民族構成は37民族で、ほぼザフスタンの民族構成に対応しており、カザフ人が約50%、ロシア人が約20%である。

国際協力・国際化への対応　本学は、ロシア及びドイツと協力している。この大学としてのボローニャ・プロセスへの加盟は2005年であるが、カザフスタン全体としてはそのための準備段階にある。2004年の「2005－2010年教育発展プログラム」の中で、ボローニャ・プロセスへの参加が掲げられ、第1段階の3年間が条件整備の期間、次の段階において参加申請を行う期間と定めている。2005年から高等教育の現代化への取り組みを開始し、条件の整った大学から3段階システムへの移行と単位制度の導入を始めた。

2009年2月には、ボローニャ・プロセスの監察委員会がカザフスタンを来訪し、助言・相談を行った。カザフスタンはヨーロッパではないため、加盟するには別の条件をクリアしなければならない。即ち、ヨーロッパ以外の国は、加盟する前に1954年に締結された「欧州憲章」を批准しなければならないという条件であり、既に批准のための申請は行ったが、現在その手続きが進行中である。

制度としては、既述のように4－2－3制であるが、カザフスタンは12年制初等中等教育制度への移行を実験的に開始している段階であり、これは移

行するまでのモデルである。移行すれば別のモデルが考えられるかもしれない。現在のところ、3−2制よりも、マギストルの2年間を実践家養成の1年ないし1年半に短縮することを考えている。また、博士課程の場合は最低3年間とするといったことも検討中である。

道徳教育・国民統合の教育　国民としての意識の高い学生を養成したいので、訓育活動プランを作成して実施している。具体的には、学生自治やスポーツ活動を通して行う方法、愛国心や意識高揚のための行事・イベントを実施する方法などである。民族や言語による差別はしないように、寛容な精神をもつように指導している。

その後、施設と授業見学を行なったが、ともにきわめてレベルの高い内容であった。複数言語センターでは教員だけではなく、3言語による人材養成の実験を行っており2007年から開始しているが、カザフスタンではここだけであるとの説明を受けて、3言語教育の授業を参観した。カザフ語グループの学生13人クラスであり、教授言語は英語で随時3言語スイッチによる高度な授業が行われていた。

(8) カザフスタン教育・科学省

同省において、以下の項目について詳しい説明を受け質疑応答と懇談を行なったが、本稿では割愛し、項目と概要のみ掲げておく。(詳細は中間報告書参照)

カザフスタンの高等教育機関、初等中等教育、12年制教育制度への移行、宗教の教育における位置づけ(カザフスタンは多民族・多宗教の国なので、09年から選択科目として導入)、**国際学力テストへの対応**(PISAには、09年から参加する。これは実験的参加ではなく、正式の参加である。日本の場合と同じように、結果は良くないことを予想している)、**経済格差と学力格差、英才学校について**(カザフスタンには106校の英才学校が活動しており、最近ナザルバエフ大統領は、20校の知的学校を建設した。3段階の入学試験を行うが、全ての国民に開かれている)、**教育の無償制・部分的独立採算制について。**

結びにかえて

ここで、タジキスタンとカザフスタンとの対比的記述をひとまず終えることとする。両共和国にはさらに当研究班の複数グループが学術調査に赴き、法令関係をはじめ日本では入手しがたい個別の貴重なデータを収集し分析を進めている。2010 年度もこの作業が継続される予定であり、今後の学術的進展を期すとともに、クルグズスタン、ウズベキスタン担当グループによる学術調査のデータとの対比・照合・分析といった重要な作業を含めて、今後の課題としておきたい。

本稿では冒頭に述べたように、筆者の担当地域とデータに限定して、エスニック・アイデンティティと言語問題を中心としたラフなスケッチにとどめておいたが、それを以てしても中央アジアの対照的な 2 共和国の多面的な特性が、おぼろげながら浮かび上がってきたのではないだろうか。

たとえば、中央アジア諸国におけるアメリカや EU、ロシアに対する距離感の相違は、英語やロシア語等の諸言語に対するベクトルの相違として反映され、直ちに学校教育のカリキュラムにおいて具体化される。カリキュラムに見られる言語教育（基幹民族語、非基幹民族語、母語およびロシア語・英語・その他の非母語）の布置は、まさにエスニック・アイデンティティの見取り図とも言えるものであり、宗教や道徳教育などの諸教科（とりわけ人文関係科目）とも連動して、諸民族の「われわれ」意識を醸成しつつ、あるときには「自己」と「他者」を分断し、またあるときには両者を包摂・融合していく。中央アジア諸国の「言語法」の制定は、その象徴といえるだろう。そこには、改めて「母語」（母国語と同義ではない）とは何か、を執拗に問いかけてくるさまざまなエスニック・コンフリクトの具体的位相が存在することを認めざるを得ない。

今述べてきたプロセスとアスペクトは、その国ごとに独自の相貌を呈しており、安易な一般化を峻拒する。「中央アジア」というあまりにも一般化された用語によって、われわれの内部に長年にわたって蓄積されてきた安直なステレオ・タイプを掘り崩し、「グローバリズム」の背後に伏在する現代社会の流動的現実を直視する契機にしたいと願いつつ擱筆する。